

「生活圏における社会資源・空間資源・私的關係資源の相互關係の類型化
—防災に活用できるパターン・ランゲージの提案—」

代表 黒石 いずみ （青山学院大学総合文化政策学部 教授）
委員 葉袋 奈美子 （日本女子大学 家政学部 住居学科・教授）
竹内 光子 （日本女子大学大学院人間生活学研究科生活環境学専攻・博士課程）
篠原 聡子 （日本女子大学 家政学部 住居学科・教授）

[研究報告要旨]

災害が頻発する現在、各地で進む少子高齢化に伴う互助の仕組みの弱体化を解決するために、地域包括ケアや公民館活動などの社会資源と、公園や空地などの空間資源の効果的な連携運営を図る仕組みづくりの必要性が指摘されている。またそれ等の資源を被災者が活用し、生命保持と同時に精神的保護を可能にするためには、私的領域から公的領域への段階的な移行を可能にする個人的な地縁や関係性が補完的に働く事、従前の居住地域の近接性と社会組織の持続が重要である事が指摘されている。そこで本研究では、空間資源、社会資源、そして私的関係資源の関係性のパターン化で、生活行為を意識した防災に有効な地域計画を示すことを試みた。

研究対象として、都市部の町内会が残る地域2ヶ所で、コミュニティの制度的・人間的・空間的仕組みの研究と、私的空間と公的空間の接点の研究、そして郊外大規模集合住宅の高齢者コミュニティの研究を行った。その結果、地縁型コミュニティをシルバー人材や地域活動を促すNPO等も含めた形で捉え、その活動領域や人的ネットワークを柔軟に捉えることが、住民生活の実態に即した持続的コミュニティを可能にすること、地域で日常的に活用されている余剰空間や境界領域で行われる任意の住民同士の交流が、行政組織の枠組みでは対応できない問題を顕在化させ、解決する道を生み出すことを把握した。クリストファー・アレグザンダーのパターンランゲージの区分と、歩行者のイメージを整理したケヴィン・リンチの5つの要素を参照し、調査結果を分類したところ、現代の都市や郊外のコミュニティ形成には、それ等の空間構造分析からはみ出す人的ネットワークと空間、社会制度の融合した要素が重要であり、それが人々の集いや交流の場となることを見出した。その交流の場のグラデーションが市街地内に散在されて、複層的な人の出会いの場と助け合いの工夫が形成され、新たなコミュニティが再生できることが、今後の災害への備えになることを明らかにした。